

若者自立支援 から 若者協同実践へ

今回の特集企画では、法制化時代を迎えて協同労働がどのような社会的な価値を持ち得るのか、若者との関係に焦点をあてることで考察しました。

過去の協同の発見誌から協同労働と若者の関係を振りかえると、第50号(1996.5)に「若者たちと労働の未来」が特集されています。この時期はバブル崩壊後のいわゆる就職氷河期と重なり、若者たちは就労を通じた生活と発達の保障を奪われていきました。

第158号(2005.9)の特集は「若者の今と社会的自立のネットワーク」で、この年に若者自立塾が、翌年には地域若者サポートステーションがスタート。就労に困難を抱える若者の存在が社会問題化し、若者自立支援の制度化がはじまりました。第213号(2010.4)の特集「いま求められる若者の自立・就労支援」では若者自立支援の取り組みの広がり紹介されていますが、第246号(2013.3)の特集「若者支援—支え合い、ともに生きる社会へ」になると、焦点が支援者から若者当事者へと移っていき、若者自身の声で生きること・働くことが語られています。

サポステをはじめとした若者自立支援制度が迷走していく中で、JYCフォーラムは「若者協同実践」を掲げて、制度化された「若者自立支援」が前提としてきた支援—被支援の関係をこえた協同実践に注目してきました。

一方で、ワーカーズコープの事業現場では、自立支援という意識ではなく仲間として若者たちを受けとめて、いっしょに働くことを追い求めてきた実践がありました。

座談会「若者支援をめぐる『協同』の可能性を問う」においては、JYCが追求する「若者協同実践」とワーカーズコープの協同労働をクロスさせた時に見えてくる可能性を探りました。若者支援を軸として、生きること、学ぶこと、働くことについて白熱した討論になりました。大高さん、南出さん、古村さんには感謝申し上げます。

篠原さんには、サポステ事業に長く携って感じる問題点と、その中で見えてきた可能性について率直に述べてもらいました。

鹿児島山事業所の実践は、まさに「支援」をこえた支援と言えるものだと思います。入山さんには、国立市公民館コーヒーハウスの取り組みを通して、地域の居場所の中でどんなふうに若者たちが成長していくのかスタッフの目線で報告していただきました。

若者たちの未来を切り開く鍵として、「協同」の実践がどのような役割をはたしていくのかこれからも引き続き探究していきたいと思います。

(協同総合研究所専務理事 利根川 徳)